

2010年度唯物論研究大会
第33回 (in 一橋大学)

平成 22 年 10 月 28 日

名古屋市立大学「市民学びの会」講師
久田健吉

家族社会論とヘーゲル哲学

現代家族論

『いっしょに暮らす。』(長山清生)に見られる家族論 資料① (p1 ~ p6)

①いっしょに暮らせない人たち

② [古い] 家族論の崩壊

生涯未婚率と離婚率の増加。家族の体をなさない家族が出現。

③希望する者どうしの共同生活

④古い家族 [論] を支えた厳しい生活

家族は生活を支える手段、必要物。婚姻は自立・解放を意味した。

⑤共同体も必要の産物

共同労働を必要とした [農村] 共同体。長屋と木賃宿の違い。

⑥ユートピア共同体の失敗

必要から離れた理想論のゆえに。

⑦夏目漱石の試み

いっしょに暮らすのが本当の家族。必然の家族から自由の家族へ。

*いっしょに暮らせない人がいる。だからいっしょに暮らせるための技術や家族のあり方を考えてみようということをテーマにしているが大変よいが、しかし結婚の意義や意味の解明が問題にされていないのを残念に思う。

*性生活・育児の問題も問題にしていない。問題にしなくて家族論は成り立つのだろうか。

『世代間連帯』(上野千鶴子・辻元清美)に見られる家族論 資料② (p7 ~ p13)

・結婚は永久就職ではなく1つの選択肢。

・だからおひとり様でも生活できる国生活設計可能な国・社会づくりが必要。
生活単位を世帯単位から個人単位にかえる。特に税制や賃金、介護・国保などで。

同一価値労働同一賃金を実現する。ジェンダーは平等でなければならぬ。

労働の柔軟化 (非正規雇用) は大切。だが首切り自由・低賃金では逆行。

シングルマザー、シングルファザーでも子育てでできる子育て支援が必要。

*この書でも家族の意義は問題にされない。家族がセックス共同体論で終わっていいわけではないはずなのに。それに子育てへの言及が乏しいのも気になる。

*この論ではいっしょに暮らせない人は一層放置されることになる。孤独も1つの選択肢となるから。おひとり様は孤独でないと言おうが、孤独になる可能性は大きい。